

御師住宅（旧外川家住宅）

18 世紀と 19 世紀の富士講信仰の最盛期には、毎夏何千人という巡礼者が儀式として富士山への登頂（登拝）に訪れており、富士講の講の大半が、小規模のグループを毎年送り込んでいました。最初の立ち寄り先は、巡礼者に信仰の指導や、登山に必要な物と装備を提供した神官、御師が運営していた富士講信者のための宿坊（御師住宅）でした。

ある時期には 86 軒もの御師住宅が富士吉田にありましたが、現在宿泊できるものはほんのわずかです。外川家は、先祖が運営していた御師住宅を宿泊に供する代わりに、かつて登拝する富士講の巡礼者がどのように旅支度をしていたのかが詳しくわかる展示物を展示する生きた博物館にすることにしました。

襖と旅支度

御師住宅は、最大限の数の御師住宅が隣り合うことができるよう、間口が狭く細長い目抜き通り沿いの敷地に建てられており、それぞれの御師住宅の前には石碑と、襖に使うために富士山の水が引かれた水路がありました。また、御師住宅にはいくつかの入り口があり、最も広いものは、位の高い役人、信仰に関する偉大な業績のある来客や、御師専用となっていました。

入り口の奥は、宿によってそのレイアウトが異なっていました。たとえば、外川御師住宅は、台所や食堂があった主屋と、後に敷地の裏に増築された裏座敷の 2 つのセクションに分かれていました。毎日 20～30 人を泊めるには非常に多くの食器、寝具やその他の雑貨を要しましたが、講は、所定の御師住宅に必要な物品を寄付しており、それぞれが他の講よりもっと多くの寄付を行って信心深さを示そうとするという、富士講独自の伝統によりこの需要を満たしていました。登拝は予め計画されていたため、必ず各グループにはそのグループが提供した食器類で食事を提供できるようにスタッフは家中の様々な食器や様々な用具をローテーションして使っていました。こうした長期的な関係を保つために、御師はオフシーズンになると江戸などに出向き、富士講信者の家を訪問していました。

裏座敷は外川御師住宅の信仰の中心となっており、ご神前の間という部屋では、御師が巡礼者に信仰と登拝する際に行うべき事について説きました。また御師は、巡礼者に代わって富士山に対して祈りを捧げ、またその間先達と呼ばれていた巡礼者の代表は率先してその他の巡礼者と一緒に富士講の教義を表現した念仏を唱えました。これらの儀式の録音は旧外川家住宅で再生され、この時代にはよくみられた神秘的な雰囲気を実現しています。

巡礼者は裏座敷に宿泊し、厳しい登拝に出発する前の最後の快適な夜を楽しみました。ただ、快適と言っても、夏の登拝の最盛期には、非常に多くの宿泊客が滞在したため、その一部には廊下で

寝なければならない者もあり、実際には「少なくとも比較的快適だった」というべきでしょう。

過去を伝える遺物

外川家の御師住宅の主屋は 1768 年に建築され、裏座敷は、その約 1 世紀後の 1860 年ごろに増築されました。この住宅は、必要な保守や修復以外には、巡礼者にサービスを提供していた時代どおりに維持されており、ここには、その教えが富士講信仰を一般に広めたことにより崇拝されている食行身禄（1671-1733）の像をはじめとする多くの貴重な遺物が収蔵されています。また、巡礼者が登拝時にまとっていた稀少な行衣も展示されています。富士山を現世の先にある霊的な領域だと考えていた富士講では、同じ行衣を亡骸を包むものにも使っていました。信者は自分の登拝を記録できるよう山頂への道すがらの神社や参拝ポイントで各自の行衣に御朱印を押してもらっていました。

御師住宅（小佐野家住宅）

御師住宅についてもっと知りたい方には、小佐野家がかつて運営していたものをふじさんミュージアムの敷地内にそのまま復原した御師住宅にも行ってみることをお勧めします。この住宅と旧外川家住宅を比較すると、富士講信仰という広い枠組みの中、それぞれの御師一族がいかにして独自の伝統を維持してきたのかがわかります。